

---

# ヨワイマホウツカイ

龍急

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヨワイマハウツカイ

### 【Nコード】

N1089Y

### 【作者名】

龍急

### 【あらすじ】

この作品はネギまの二次小説です、しかし基本的に主人公はプラスみたいなキャラで本編キャラとなく一緒にいるようなキャラですのでネギまの本編が大幅に変わることはありません、ご了承ください。(転生ではありません、トリップでもありません、最強でもありません、アンチもたぶんありません、チートもたぶんありません、ラブコメはしたいと考えてますができるかわかりません、基本的に自己満足なので無いことばかりです、それでも読んでいただければ光栄です

## 意味のないプロローグ

魔法使い

鬼やドラゴンを一撃でなぎ倒し、  
どんな傷でも一瞬で治療ができる。  
誰よりも強く、  
誰よりも優しい  
それが魔法使い。

嘘

今のは嘘だ。  
そんなこと、誰にでもできるわけじゃないんだ。  
少なくとも僕にはできない。

魔法が使えるからって期待するなよ  
魔法が使えるからって何でもできるわけじゃないんだよ  
たかが魔法だ、  
火が使いたいのなら道具を使えばいい。  
強くなりたいのなら武術を習えばいい。  
人を殺したいのなら武器を持てばいい。

たったそれだけのことなんだ  
不可能を可能にすることなんてできない。  
不幸を幸福にすることもできない  
絶望を希望に変えることすらできない

幻滅したかい？ 不愉快になったかい？

そんなもんだよ魔法なんて  
そんなもんだよ世界なんて

決して平和ではなく

決して強くなく

決して優しくなく

しかし、悲観することでもない

だからこそ平等で

だからこそ努力して

だからこそ美しいのだから

まあ所詮は戯言だけど

忘れてくれてもいい

心に残してくれてもいい

たかが一人のガキが、

社会も知らないただのガキが勝手にほざいてるだけなのだ。

## 伏線が多い第一話

家族が大切です、特に妹

突然だが家族の話をしよう。

母は事故で死んでしまったが今でも尊敬している。

父はだらしがないが大学の教授で実は頼りになる。

そして元気を三回言っても、たりないくらい元気で可愛い妹がいる。

本当に可愛い、

妹じゃなかったら口説いているくらい可愛い、

あえて表現するなら子犬みたいな感じで可愛い。

無論、妹に手を出すほど落ちぶれてはいないが彼氏ができた時は全力でガンを飛ばして変な質問ばかりしてやるつもりだ。まあ妹は若干のパソコンで極度ファザコンなので、もし彼氏ができたら報告をしてくれるだろう。

失礼、話がそれた。

そんな父と妹だけど、今は一緒に住んでない。

別に複雑な家庭の事情とかではなく、単純に僕も妹も全寮制の学校に通っているからだ。

妹の顔を毎日見れないなんて悲しすぎて涙が出てくる。

嘘だ、

確かに寂しい気持ちにはなるが、流石に涙が出てくることはない。

というか、再開が一年前で実は八年間くらい会ってなかったのでぶっちゃけ接し方がいまいぢわからなかったりする。

そして、その妹から電話がきた。

一週間に一度は電話でやりとりをするのが我が家の家訓になっている。

ただでさえ、家族同士で会うことが少ない我が家なので、父が家族とのコミュニケーションを増やすことを考えて考案したものだ。

……まあ、妹はそんなの関係なくほぼ毎日父に電話しているよ  
うだが

さて本題だ

「すまん、もう一回言ってくれないか？ どうやら歳をとりすぎて耳が悪くなったみたいだ」

『私と二つしか変わらないでしょ……だから今日ね、新しい担任が来たんだけどその先生が10歳の少年だったの！ しかも外国人でめつちや可愛い！！』

What? 10歳だと？ 労働基準法とかどうなの？ 外人だからセーフって落ちか？

というか10歳の少年にウチの妹を任せないといけないのか？

いやでもセクハラされることはないから逆に安心なのかな？ いや  
まで、10歳ということを利用して逆にセクハラしまくるんじゃない  
のか？ 子供だから許されるよレベルのセクハラをしまくってウ  
チの妹にも被害がでたりして、ウチの妹は微妙に発育がいいから非  
常に心配なのだが……いや発育できなことでの問題はないか、確か  
にウチの妹はとても可愛いが、可愛いが！（肝心なことなので二回  
言った）発育といった面なら妹とよく一緒にいる大河内さんのほう  
がすごい、あれで中学生とマジで半端ないというのに、それよりも  
上が妹のクラスにはいるというから驚きだ、一度クラス全体の写真  
を見てみたい気もする。

『もしもーし？ あー、妄想モードに突入しちゃったよ……まあいや、早くお父さんにも連絡しよ プツツ、ツーツー』

10歳の時って僕何してたっけかなあ、確かまだ麻帆良に入る前だから、近所の友達と一緒に遊んでいたよなあ、妹も混じって川で魚を釣ったり、妹も混じってバスケしたり、妹にちよっかい出す馬鹿共に間接的ないやがらせをしたり、そーいや僕っていつも妹と一緒にいたなあ、中々いいお兄ちゃんをやっていたんじゃないだろうかっであれ？

「電話切れてるし」

この野郎、どうせ父さんに早く電話をしたいから切りやがったな、今度変な服装をしてあいつのクラスメートの前で明石裕奈の兄ですって言うてやる。そしてみんなから同情の眼差しを受けて変な空気になるてしまえばいいんだ、ばーか

それにしても、十歳の先生かあ……

麻帆良 ここ に来るってことはやっぱり魔法使いつてことになるのかな？ まだ、断定はできないけどその可能性は十二分に捨てきれないし。

とういか一番気になるのは十歳で先生になれるほど頭がいいってことか、最低でも大学を卒業できるくらいは頭がよくないといけなから……ってうわ、考えるんじゃなかった、十歳の子に頭の良さが負けているのか僕は、いや大抵の人はそうなんだろうがそれでもかなりシヨックだ、気分的に。

「はあ………夕飯でも食いに行くか」

やはり自炊できないってのは大分痛い、いやできないってわけでもないが料理をするのが楽しいと思えるような性格をしてないし、作っても皿洗いとかが面倒だし、そう考えると我が妹って偉大だと思う、母親の変わりに毎日料理作ってくれたもんなあ、後片付けもしてくれたし……。

ああ手料理が恋しい

## 伏線が多い第一話（後書き）

主人公はシスコンです。

**幽霊が見える男の第二話（前書き）**

本編キャラクター登場です。

## 幽霊が見える男の第二話

人は死んだら幽霊になる。

突然だが僕は幽霊が見える。

だからといって特に得したことはない、なんというか幽霊に色々な種類があつてたまにグロテスクなものもあるし超怖いし、幼い頃の僕にとってはトラウマものだった、でも話してみると意外に優しくつたりする人が多い、人間話せば分かり合えるもんだなと思う。ついでに魔法が使えるのと幽霊が見えることは大して関係がないらしい、だから妹はもちろんのこと、父さんにも見えないから昔は不思議がられた。

さて、本題だ。

僕の目の前には幽霊がいる。若干水色が混じつた白髪に黒いセーラー服、顔立ちを整っている以外は幼くもなく大人びてもなく普通の中学生だ、個人的には幽霊でもこんな美少女と友達になれるのはかなりうれしい、うれしいのだが……。

「そんな羨ましそう目で見ないでよ、食べづらい」

「うう、そんなこと言われましても……」

ちょっと半泣きになっているのを見ると若干罪悪感がわく、幽霊だから食べれないのは仕方ないけれども、だからって人の食事を妨害しないでほしい。

「というか、ここで食べるって言ったのさよちゃんじゃん」

「……………だって、一人でいるのは寂しいんですもん」

うわー、抱きしめてー、幽霊だから無理だけど（幽霊じゃなかったら抱きつくのかというツッコミは禁止）

実はこの幽霊、60年以上前からこの学校に住み着いているらしい、しかも見える人がいなかったの（または見えていても会話ができない）ほぼ60年間誰とも話をしてないらしい。僕は暇だったので話しかけたら、驚かれて泣きつかれた。

いや、気持ちはわからないわけでもない、なんせずっと一人だったのだから急に話せる人がいたら泣きたくなるだろう、しかも学校外に出れないらしくこのファミレスまではギリギリ行けるらしい。なんで成仏しないのかがかなり気になるが追求するつもりもない、きつとなんか深い事情があるんだろう。

実は最初は同情して話を聞いていただけなんだけど、ちよくちよくこの付近で会って、流れで友達になった。幽霊だけど美少女だから友達になれたことはかなりうれしいからね。

「そっぴえば子供が先生になつたつて本当？」

「ええ！　なんで知つてゐるんですか！？」

「さつきまで裕奈と電話してたからね」

「あ、そっぴえば明石さんのお兄さんでしたね」

思い出したように両手を胸の前で叩くさよちゃん。

妹と僕は兄妹なのにあんまり似てない、いや別に全然似てないつてわけでもないけどよく見ないとわからないくらいに似てない。僕も母親に似ればかつこよくなれたのかなーとか思わなくもない。

「で、その子供先生つて、なんか変わつてゐる所なかつた？」

「変わつてゐる所ですか？　うーん、そっぴえば、なんか大きな木の杖を持つてました」

「ぶっ！！」

「だ、大丈夫ですか!？」

思わず飲んでいたお茶を噴出してしまった。

目の前にさよちゃんがいたけど、幽霊だから普通に貫通する。

「というか絶対魔法使いじゃねえーかよ、そんなわかりやすすぎる物を持つなよ、違和感ありすぎだろ、自分は魔法使いですって言うているようなもんじゃねえか。オコジヨにされるぞ、オコジヨに

「あ、ああ大丈夫、大丈夫、それよりごめんね、いきなり噴出しちゃって」

「いえ、私は幽霊ですから大丈夫ですけど……」

そういつて貰えると本当に助かる。

貫通するからといって、顔にお茶を吹きかけられたらいい気分にはなんないからね。

それにしても魔法使いの子供先生かあ、なんか裕奈が巻き込まれたらいやだなーとか思ってしまう。まあいくらなんでもそれはないだろとも思う、いくら子供でもオコジヨにされるのはいやだろうし、理事長もいざとなったらなんとか対処するだろ。

「じゃあそろそろ寮の門限だから僕は帰るね、また今度」

「はい、また今度」

さよちゃんに一声かけて、僕はレジへと向かう。

いつも通りのことだけど店員は僕のことを同情したような目で見てる、まあ仕方がないといえば仕方がないんだけどね、一人でブツブツ言いながら食べている人を見たらそりゃあおかしな人に見えるよな。別にそれほど気にはしないが………やっぱり若干気にして

しまじゅ。

周りの目が気にしないでいられるほど、僕は強くないし

幽霊が見える男の第二話（後書き）

相坂さよを出した理由……なんとなくです。

買い物をする第三話（前書き）

本編キャラクター4人登場

## 買い物をする第三話

ハーレムに少し憧れます。

女の子と買い物をする

それだけで僕のテンションはうなぎ登りだ。実は僕、妹以外の女の子と一緒に買い物に行ったことがない、いや正確には修学旅行とか学園祭とかの買いだしとかがあるが、その話はノーカウントということにしておこう。それを女の子と買い物したという数に入れてしまふとひどく惨めな気分になる。

だがしかし、ついに僕は女の子と買い物をするという快挙を成し遂げたのだ。

「お兄ちゃん、ポケットとしないでこれもってよ」

「おう」

「お兄さん、これもお願い！」

「あ、うん」

「おにーさん、これもお願いするわ」

「はいはい」

「明石のお兄さん、これもお願いします」

「あいよー」

うん、皆まで言うな。

休日の朝にわざわざ呼び出されて、新しく担任になった人の歓迎会の時に用意するプレゼントを買うためという名目で自分の服とか買っている妹とその友達の荷物持ちだとか、女の子と買い物という桃色っぽい言葉を頭の中で出しておかないと心が折れそうになる。

「すみません明石のお兄さん、荷物持ちなんてさせてしまって……」

「いーよいよよ、別に気にしなくなつて。どうせ寮にいても暇だつたし」

とはいつてもやはり申し訳ないのか、頭を下げる大河内さん。

……………めっちゃええ子や！

まあ実際家にいてもすることはないのは事実だし、僕と違って部活で忙しい我が妹と会えるのは単純に嬉しくて樹液に誘われた虫のごとく、簡単に誘われてしまった僕が悪いのは言うまでもない。

まあ流石に中二にもなつて、兄貴と二人で買い物に行こうだなんて思わないか

それにしても、これは周りの人から見たら中々のハーレムではないのだろうか。

妹の裕奈はバスケットをやっていて引き締まっていて、しかも出る所はでているので中々のプロポーション、顔も僕とは違い母親似でこれまた母親からの遺伝である綺麗な黒髪をサイドテール（っていうんだっけ？）にしている、はっきり言うとかかなりの美少女だ。

妹の友達その一の佐々木さんはプロポーションこそ我が妹に劣ってはいるが短いピンク色の髪をツインテールにしてとても可愛らしい妹の友達その二の和泉さんもややプロポーションが弱いものの若干色素の薄い髪と目が妙に似合う顔立ちをしておりなんか保護欲をそそる。あと関西弁がいい

妹の友達その三の大河内さんはなんとというか……………中学生には見えないくらいに凄まじいプロポーションをしており、身長もあるので同級生にしか見えない、顔も大人びているので他の三人とは違って綺麗な美少女

むづ、そう考えると荷物持ちくらい、何てことないかもしれない。

「そつえば、お兄さんって何の部活に入っているんですか？ 裕奈と同じでバスケ？」

おそらく部活の話でもしていたんだろう、妹の友達その一の佐々木さんが話しかけてくる。

「いや、僕はそもそも部活動をしてないからね」

遊びでなら野球もバスケも好きだったけど、本気で打ち込もうと思っただけで迷惑がられるんじゃないかなってという懸念もあったし。

「へえ、確かに体育会系には見えませんもんね、ひよろひよろだし」  
「そのひよろひよろな男に荷物持ちをさせてるのは、どこのどいつだよ」

「あはは……」

佐々木さん……笑ってごまかすな、

他のメンバーも僕の声が聞こえていたんだろう、大河内さんと和泉さんは申し訳なさそうにしている、裕奈は目をそらしている。

さっき謝ってきた大河内さんはもちろんのこと、佐々木さんや裕奈も流石に荷物持ちだけさせるのは悪いと思っただけだろう、微妙に空気が重くなったような気がする。確かに妹たちが僕の休日を潰したのは事実だが、だからといって変に気を使わせるのも心苦しい。

「まあでも、こんな美少女達に囲まれて買い物できるなんて人生に一度か二度あるかないかだからな、別に悪い気分じゃあないね」  
「……」

しまった、ボケたつもりでらしくもない台詞を言ったのにフリー

ズさせてしまった、そういう反応が実は一番傷つく、というか自分で言っていて寒い。

「あ、あははは、変なこと言わないでよお兄ちゃん！」

一番最初に動いたのは裕奈だった。僕の背中を全力で叩く、めちやいてえ……。

他の子供も固まった空気から開放されて苦笑いしているが、そのおかげで重くなりかけた空気は一切なくなった。

まあ確かに半分は冗談だったけど半分は本気だ、もしこれがこの子供達のような美少女じゃなくてむさい男だったら、僕は何かと理由をつけてを即座に退散する。魔法を使つてでも

その後も和気藹々とした空気で購入物をし、僕は妹たちを女子寮に送りそのままファミレスに来てさよちゃんと一緒に食事をしながら今日のことを話したら普通に羨ましがられた。

いい加減さよちゃんが不憫だし、何とかしてあげたいなーとか思う。

## 買い物をする第三話（後書き）

残念ながら寒いことを言っても桃色な空気にはなりませんでした。

しかし主人公っぽくないな、この主人公

ついでに作者はこの四人の中で一番、大河内さんが好き

## オコジョに出会った第四話

わりと魔法は何でもありである。

魔法というのは奥が深い、大雑把に分けても攻撃、防御、捕縛、治癒、転移、などなどがあり、細かく言えば無数にあるとしか言いようがない、まあでも普通は自分にあつた魔法を10個くらい覚えるだけで充分なんだけど、伝説とか英雄とか呼ばれる人は100や200を超える人がいるらしい、サウザントマスターと呼ばれてるナギ・スプリングフィールドなんてその中でも最たる者だろう

さて本題だ。

僕の前にはオコジョがいる、何故か寮の前で倒れてたのを拾ったんだが驚くこと人語が話せる、そしてタバコを吸っている、個人的には高校生の寮でタバコの吸殻が見つかるのと色々と問題があるのでやめてほしい、というかどこからタバコを出したんだろう？

まあそんなことはどうでもいい、いや本当はどうでもよくはないけどツツコミ所が多すぎて僕には処理ができない次元のレベルだ。

「すまんオコジョ、もう一度言ってくれ」

ついこの間、裕奈にも同じ対応をしたと思うが気にしない、僕は万が一という可能性もあるので聞きなおしておく。

「だーかーらー、オレっちは兄貴であるネギ・スプリングフィールドを探してんだよ、あとオコジョじゃなくて、オレっちにはアルベル・カモミールって名前があるんだから、そっちで呼んでくれよ旦那」

はい聞き間違えじゃなかった、僕の耳は正常でした、だけど悲しい。

スプリングフィールドっていうことはサウザントマスターの血縁者と見てほぼ間違えないよな、というかそんな化け物レベルの人がわざわざこんな学校（まあ世界樹があるけど）に何の用があるんだよ

「えーっとカモ、そのネギさんは今どこにいるかわかるの？」

「さあ？ オレっちは兄貴がこの学校で教師をやっているとしか聞いてないから、でも最近この学校に来たのは確かな情報だぜ」

まあよくこんな所に一人（いや一匹か）で来れたなって普通に關心するよ。

でも、そんなに執念があるのなら、もうちょい情報収集をしてほしかったなっていうのが本音、麻帆良って幼小中高大ってあつて教員の数も相当多い、それを一々見て回るなんて相当骨が折れるし、唯一の救いは最近来たってことだな、それで大分絞られ　　って、最近来た魔法使いの先生？

「も、もしかして、ネギさんって10歳だったりする」

「おお、知っているのか旦那」

はあー、思わずため息がでる。これは幸運だったというのか不幸だったというのか、正直言うとそんなの無理だと言って適当に追い返そうと思っていたんだが、知っていることを教えないというのはなんか苦しい、ここで僕が嘘を吐くという考え方もあるが嘘をつくというのは大小問わずにあまり好きではない。

「うん、正確にはどこの学校で働いているのかわかった、ちょっと電話させてもらおうよ」

「おう、よろしく頼むぜ旦那」

僕は携帯電話を取り出し、裕奈に電話する。

時刻は放課後、バスケ部の裕奈が電話に出る確率ははっきり言って五分五分だ

ガチャ

『もしもしー、どうしたのこんな時間に電話して?』

「あー、ちよつと確認したいことがあるんだけど、お前の担任ってネギ・スプリングフィールドって名前だったりする?」

『あれ? 名前を教えたことあつたっけ?』

「いや言つてないと思うぞ、突然ですまんが今からその人に連絡を取れることは可能か?」

『たぶん明日菜の所にいるから大丈夫だと思うけど……』

「そうか、じゃあアルベル・カモミールさんが会いたがつてるから図書館島に来てくれと言つてくれ」

『? わかつた』

「ありがとう、じゃあな頼んだよ」

『あ、うん、じゃあね』

ピッ

なんか無理矢理感是否めないが仕方がない、裕奈には魔法のことは秘密だから細かく事情を話すわけにはいかないし（細かく話したところでわからないと思うが）、あいつはわりと真面目だから頼んだことはすぐやってくれるだろう。

「よし、一応知り合いに連絡をつけて会えるようにしてもらったから行くわ」

「おう、恩にきるぜ、旦那」

オコジヨに貸しを作ってもあまり意味はないと思うが、まあ感謝されて悪い気はしないし、魔法使いの少年先生というのはすこしばかり見たい気もするので、それほどいやではない。

ただ、図書館島まで行くのはちょっと面倒だとは思つ。

## オコジヨに出会った第四話（後書き）

本編との違いについて

本編ではカモが直接女子寮に潜入してますが、今回は倒れてるカモを主人公が拾うということになります。

相談に乗った第五話（前書き）

ネギがついに登場

## 相談に乗った第五話

生きてることは平等である、しかし才能は平等ではない

僕はこれでも魔法使いなので、変わっている人というのも何度も見たことがあり、そのたびに色々なことを感じていた。その感じたことが正しかったことも間違っていたこともあったけど、僕が見た中ではこの少年はトップに入りそうなほど異質だ。

髪が赤いとか顔立ちが可愛いとかそんなものは関係ない。ただそこにいるだけで存在というものを感じられ、その存在にひきつけられるような感覚が芽生える。

別に魔法とかを実際に見たわけじゃない。

別に優秀さを見せ付けられたわけでもない。

ただなんとなく適わないと感じた。

ただなんとなくこの存在を信じたくなった。

それがネギ・スプリングフィールドを見た時の僕の感想だ。

「どうかしたんですか？」

「あ、いや、なんでもない」

不思議そうに僕を見上げるネギ君。(さん付けはやめると言われた)

ネギ君がカモを連れてきてくれたお礼にと図書館島の近くにある喫茶店でコーヒーをご馳走になっている、なぜかネギ君に睨まれたような気がする。

「それで、これからどうすんの？」

ネギ君のとなりに座っている神楽坂明日菜さんがこれからのことを聞いてくる。

神楽坂さん、左右で違う色の瞳（ドレットアイだっけ？）でオレンジ色の長い髪をツインテールにしており、鈴がついた髪止めが印象的などても可愛い子だ………というか裕奈のクラスって可愛い子が多くないか？ 今のところ、美少女にしか会っていないような気がするけど。

で、僕たちは喫茶店で何をしているかというところとネギ君に相談された、ついこの前ネギ君は吸血鬼に襲われているのでどうにかしたいらしい、個人的には吸血鬼なんておとぎ話程度にしか思っていないからなので、話し合ったところで解決策なんてそう簡単には出ない。

「やっぱり、普通に理事長とかに相談したほうがよくないか？」

「そうしたいんですけど、釘をさされてしまって……」

顔を伏せて落ち込むネギ君。

そういった対処をされるのは当然といえば当然だよ……、見た目はただの老人にしか見えないけど、なんかすごい魔法使いらしいし理事長

「なるほどな……フツ、でも安心しろや、それならいい考えがあるぜ、兄貴」

「えっ！」

「何かあの二人に勝つ方法があるの!？」

ネギ君と神楽坂さんは二人そろって身を乗り出す。

ネギ君が認識障害の魔法を使っているため、カモ君が喋っても問題はないうがやはり動物が喋るといのはすごい違和感があるな。

「ネギの兄貴と姉さんがさくつと仮契約して、片方を二人がかりでボコつちまうんだよ」

「ぼ。僕とアスナさんが仮契約ー!?」

「あの、仮契約って……?」

「あー簡単に言つと、魔法使いとキスをして魔法を使えるようになるってこと」

「えー!!! 何それ!?!」

うん、いくら認識障害の魔法がかけられているからって叫ばないでほしい、周りの視線が痛いって……というかこれって僕が喋っているように見えるのかな?

「いや、僕も仮契約をするのは賛成だよ、戦うにしても逃げるにしても戦力が大きいに越したことはない」

「で、でも……」

「ちょ、ちょっと私はイヤよ、なんでネギなんかとチューなんてしないといけないわけ!?!」

神楽坂さんの意見はごもつともだ、思春期真っ只中の中学生が十歳の子供にキスをしたとは思わないか。まあでも、ネギ君は十歳とはいえ顔がかなり整っているし、ちょっとキスするくらいなら別に構わないような気もするが、そこら辺は個人の考えの違いだろう  
たかがキス、されどキスか…

「ああ、もしかして姉さんは、中3にもなつてまだ初キスを済ませてないとか……?」

「なっ……!?!」

「フッフ…いやこれは失礼、じゃあ仮契約と言えど抵抗あるでしょうな……」

「なっ……何いってんのよ!? チューくらい別になんでもないわよっ」

「じゃOKということ、兄貴はどうする?」

「うっっ……」

「コ、コラ、人の話をちゃんと……」

うわー、見事に口車に乗せられてるよこの子。カモの口がうまいのか、この子が単純なだけなのか、それとも両方なのかはわからないけど、僕にはあまり関係のないことだから別に口は出さない。

「わ、わかった! 僕もやるよ!!」

「よっしや、そーこなくっちゃ!!」

「えー!?! 何勝手に決めてんのよー!」

「お…:お願いします、アスナさん! 一度だけ!! 一度だけでいいですから!!」

「……もっっ、ほ、本当に一度だけだよ?」

お、交渉が成立したみたいだな、今の発言を聞くだけだと案外神楽坂さんって押しに弱いのかもれないな、まあ十歳だからってこともあるんだろうけど

「解決策は見つかったみたいだし、僕はそろそろ帰らせてもらっよ」

「あ、はい! カモ君のことありがとうございます!」

「いえいえ、じゃあそっちも大変だろうけど頑張ってね……あ、そうだ」

「はい?」

「明石裕奈のことを今後ともよろしくお願いします、あいつは魔法使いの関係者じゃないけどいい奴だからこれからも良くしてやってください」

僕は深々とお辞儀する。

なんか娘を嫁に出した親のような言い方だけど、まあ気にはしない。見た目は十歳だけど先生という職についているのだから、これくらいは言っとかないと

「え、えっと、もしかして明石さんの……」

「はい、兄です」

そう言っって今度こそ僕は立ち去る。

なんか後ろでうわ全然似てない！ とか聞こえてるけど気にしちやいけない、今更のことだし。

はあ、キスとかあんまり良い思い出がないなあ……

## 相談に乗った第五話（後書き）

本編との違い

時系列が少し違いますが大して変わることはありません。

## 魔法は危ないと思った第六話

この世界にはいい奴がいる。

僕はなぜか猫に好かれる。

個人的に猫は好きでも嫌いでもないが、あえていうなら飼おうとは思わないけどまあ可愛いなと思うくらい好きだ。昔は裕奈と一緒に猫を飼おうと父さんや母さんにねだったけれども、それは単純に猫が好きだからじゃなくてただ新しいものを求めていただけだと思う。そう考えると飼わなくて正解だった、動物を飼うというのは色々大変だし責任を持たないといけないから。

さて本題だ

僕は猫に好かれるからといって大して得したことはない、ただあえて得をしたと感じられたことがあるとすれば猫をきっかけに一人の女の子と友達になったということだ、しかもそいつは僕とは比較にならないほど“いい奴”だということだ。

単にいい奴と言っても色んな種類がいるが、こいつの場合は他人に何の見返りも求めず当然のように善が行えるいい奴だ、おそらく今のポロポロの姿もどこかで困ってた奴を助けるためにした代償なんだろう。

「でも、その格好はないだろう……」

「はい？」

「いやなんでもないから、汚れた所とか拭け、家族に怒られるぞ」

僕はそう言って絡繰にタオルを投げわたす。

絡繰茶々丸、薄い黄緑色の髪を腰まで伸ばし覇気がない瞳とイカ

した耳飾をしている美少女。一年ほど前、僕と同じように猫をひきつけながら歩いているところに出くわし、何故か微妙にシンパシーを感じて話すようになってから、猫の溜まり場である教会の広場でたびたび見かけては話しかけながら猫に餌をやっている。（猫の餌も自腹で買っているらしい、ここらへんも僕とは違う）

「ありがとうございます」

僕にお辞儀をして足や腕などについた水滴を拭き取る絡繰、その姿が妙に色っぽく見えたので少しドギマギしていたがなるべく顔に出さないようにする、うーむ最近の中学生は発育がよくてこういう時少し目のやり場困る。ここにいる絡繰しかり、大河内さんしかり

「では、このタオルは私が洗っておきますので、後日返しますね」

「いや別にそんなことしなくていいよ、わざわざ返しに持って帰るのは面倒だろ」

そう言いながら僕は絡繰から奪い取りバツクにしまう。

絡繰は押しに弱いから、こうやって強引にとってしまえば何も言わないのだ…… たぶん今の僕は、客観的に見たら女子中学生のタオルを奪い取る男子高校生 へんたい だな

ザッ

「ん？」

「……………」

教会の広場はあまり人気がない、夕方になればなおさらのことだ。だからこそ、そんな場所にネギ君と神楽坂さんがいるのは少なからず驚いてはいる。

「やあネギ君、明日菜さん、昨日ぶりだね」

「……………すいません明石さん、少し下がっててください」

む？ 社会的に見えたネギ君があいさつを返さないなんて以外だ。何故か二人の雰囲気が重くなっているような気がするし、隣にいる絡繰も臨戦態勢に入っている感じがする、確かネギ君は明日菜さんと二人で吸血鬼を倒す算段をつけていたはずだが……………ああ、なるほど

絡繰茶々丸がネギ君を狙う吸血鬼の従者ということか

「あの……………茶々丸さん、僕を狙うのをやめていただけじゃないでしょうか？」

「すいません、ネギ先生……………私はマスターの命令がすべてなので

「うう……………仕方がないわね」

「では茶々丸さん」

「はい」

ネギ君は杖を構え、そして魔法使いならではの魔力の流れを感じる。

個人的には友達である絡繰に助力してあげたいという気持ちがあるが、僕はネギ君が命を狙われているということを知っている、命がかかっているので気軽に手を出していい問題ではないので僕は見ていることくらいしかできない。

「神楽坂アスナさん……………いいパートナーを見つけましたね」

「契約執行10秒間！！ネギの主従、神楽坂明日菜」

ネギ君が唱えた呪文によって神楽坂さんの身体能力は上がり、絡繰の間合いへと一瞬でつめ殴りかかるが、絡繰は一瞬で反応して受けなす。

目にも止まらぬ攻防戦、おそらく今は勢いで押している神楽坂さんが優勢に見えるが、攻撃をすべて受け流し冷静に対処できてる絡繰のほうが格闘技術で言えば上なんだろう。しかしこれは一対一ではなく二対一、僕とは違い本物の魔法使いであるネギ君がいる時点で絡繰が勝てる確立はほとんどないだろう。

「ラス・テル、マ・スキル、マギステル！ 光の精霊11柱！ 集い来たりて敵を射て！ 魔法の射手！ 連弾・光の11矢！！」

絡繰が神楽坂に気をとられている間にネギくんの魔法は完成する、流石は天才少年、魔力の量からして違う、おそらくまともに当たったらひとたまりもないんだろうな

「追尾型魔法至近弾、回避不可能と判断します……… すみません明石さん、私が動かなくなったら変わりに猫の餌やりを」

11本の光の矢が絡繰に向かって放たれる、それは僕が思った以上に凄まじい威力でしかも絡繰いわく追尾型らしい、あんなものが当たったら痛いじゃすまないのに猫のことを僕に頼むなんてどんだけいい奴なんだろうか、こいつは。

あー、なんかかっこつけたくなってきた

ドゴゴゴン！！！！

光の矢が雨のように降り注がれて全弾命中。

僕に

「何…で？」

お、無表情が売りの絡繰も流石に動揺しているな、はは、珍しいものが見れた。

さあてね、本当に僕は一体何がしたいんだろう、まあでもいい奴と美少女と友達というのはそれだけで価値があるものなんだし、体を張って守るだけの価値は十分すぎるほどあるだろう

あー痛い、ちょっとかつこつけてみたけど痛いものは痛い、折れる音は聞いてないけど骨とか折れてんじゃねえーの？ 本当は叫びたいほど痛かったけどなんか声がうまく出ないし、段々と意識が朦朧としてきたし、というかこれは流石にやべーな

はあ、ここで意識が飛んだらあんまりかつこよくねーよなあ……

**魔法は危ないと思った第六話（後書き）**

本編との違い

ネギが自滅するはずが主人公がかばいました。

珍しく主人公の見せ場があった。

## 病院じゃなかった第七話

目をそむけるな、それが真実だ。

目が覚めたら知らない天井だった、こういう言い方をすると大抵は病院を連想するのが多いのだが、ここは病院ではないということはある、なぜなら僕が今まで見たことがない木の天井であったためというのもある。木製の病院というの存在するのだろうが、少なくとも麻帆良でそんな病院は見たことがないのでおそらく違うので、必然的にここは誰かの家なんだろうなと思う。

「うっ……!!」

体を起こすと体中に痛みが走る、そしてようやくネギ君の魔法を食らって気絶したことを思い出した。まああれだけ強力な魔法をまともに受けといて無傷というわけじゃないだろう、体中に包帯も巻かれているし、もしかしたら僕が思っている以上に怪我はひどいかもしれない

「ヨウ、目が覚メタミタイダナ」

なんか声がした、しかも発音が妙に片言だ

上半身をあげて周りを見渡して見るが、あるのは人形くらいで人影どころか幽霊さえ見当たらない。空耳かなとも思うが、あれだけしっかりと声が聞こえといて空耳だったとしたら、僕はすぐに頭が耳の病院に直行しなくてはいけないと思う

「えっと、どこにいるんですか？」

とりあえず返事をしてみた。もしこれが本当に空耳なら僕は誰も人がいないのに返事をする変なやつにしか見えないだろう。

「ケケケ、目ノ前ニイルジャネーカ」

うん、やっぱり聞こえる、だが声がした方向にやっぱり人影はなく人形だけしかない。

ということはもしかして……

「あんたが声の正体？」

「オウ」

どうやら正解だったらしい、

人形に取り憑いている幽霊なら何度か見たことがあるが、どうやら幽霊が取り憑いているってわけではなさそうだ、かなり驚いているが魔法使いも幽霊もいる世の中なのだから人形が喋ることもあるだろう。

「それでここって何処なんですか？」

「ケケケ、カノ有名ナ闇ノ福音ノ家ダ」

闇の福音、確か最大の賞金が賭けられた伝説の吸血鬼、ということとはおそらくネギ君を狙っている吸血鬼というのは闇の福音で、その従者である絡繰がここまで運んできてくれたんだろう。

大変だなあネギ君、というか僕はどうやって運ばれたんだろう、お姫様抱っこ？

「ン、ナンダ、反応ガ薄イジャネーカ、信ジテネーノカ？」

「いや信じてるし充分驚いているんだけど、なんか実感がわからない

んだよね」

そう、実感がわかないんだ

小さいころにすごい悪党だっけって教えられていたけど、いきなりその吸血鬼がここにいますよーって言われてすぐにそれを実感できるほど僕は大人じゃない、

「ああそうだ、僕ってどのくらい寝てた？」

「一日クライダナ？」

「……………まあネギ君の魔法をまともにくらったなら、そのくらいは寝てても仕方がないか」

一瞬耳を疑ったが、生身の人間があれだけ強い魔法をくらっているんだ、むしろ永遠の眠りにつかなくてよかったと思う、

そういえばあの後ネギ君と絡繰の対戦はどうなったんだらうか、絡繰が運んでくれたってことはネギ君が返り討ちにされたか、逃けたかのどちらかだろう。体中に痛みを感じるが立ち上がる、丸一日寝ていたのとくらった魔法のせいで少しふらつくがたいして問題はない。

「いつつ……………絡繰はここにいるのか？」

「イヤ、サツキ御主人ノ薬ヲ買いニ行ツタカラ今ハイナイゼ」

「薬って……………病気なのか？」

「花粉症ダ」

吸血鬼、しかもあの闇の福音が花粉症でダウンか、イメージがかなり壊れているような気がするが、まあ吸血鬼だろうと何だろうと花粉症は辛いんだろう。

『き、貴様、何を見たんだ！ 何所まで見たんだ！！ 言えー！！』

『ぼ、僕は何も…』

『嘘をつけー！！貴様ら親子は……殺す！ やっぱり今殺すー！！』  
『うひゃー！！』

「花粉症のわりには元気だな」

「……………」

僕の中で闇の福音のイメージがバリバリ変わっていく。

まあネギ君がここにいるということは和解したんだろう、でも闇の福音をあそこまで怒らせるなんて一体何をしたんだろう、ネギ君って真面目なように見えて実はイタズラが好きなのかもしれないな、まだ十歳だし

それにしても闇の福音って案外親しみやすいのかもしれないな。

病院じゃなかった第七話（後書き）

主人公はおんぶで運ばれました、残念ながらお姫様抱っこではありません。

## かつこつかない第八話

友達です。

僕と喋っていた人形はチャチャゼロというらしい、闇の福音の魔力で動いている闇の福音の最初のパートナー、本人いわくめっちゃ強いらしいが闇の福音はサウザントマスターに封印されて魔力がほとんど使えなくなっている。今は喋るくらいしかできない、個人的には直接封印された闇の福音よりもこつちに同情してしまう、意識があるままで動けないなんて僕だったら自殺したくなる。

さて現実逃避終了だ

僕は今、闇の福音エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルで正座をしている、僕個人が闇の福音に何かしたのではなくネギ君が闇の福音の夢をのぞき見てしまったのが原因で、ネギ君に助けを求められて事情を大まかに聞いた僕は「失恋するのも経験ですよ、むしろ失恋してから女性は美しくなる」と知ったかぶった慰めをした。僕まで怒られた、個人的にはそんなことをされたのに恋心が冷めないなんて普通にすごいと思う、僕なんていまだに初恋もしたことがないというのに

「人の夢をみるとは何様だ！ まったく貴様らは親子はどれだけ私を怒らせれば気が済むのだ！！」

「す、すいません！」

「貴様も貴様で勝手に失恋したと決め付けるな、私はまだ諦めてない！！」

「すいません」

泣きながら謝り続けるネギ君と平謝りしながら土下座している僕  
僕の場合はほぼ完全に理不尽なとぼちりだが半泣きになりなが  
ら、顔を真っ赤にして怒っている姿を見ると、言い返すのも何だか  
可愛そうになってくるので何も言わない。

エヴァンジェリン・A・K・マクダウエル

何百人という人を殺した吸血鬼の真祖で史上最高の賞金首、『闇  
の福音』『不死の魔法使い』『悪しき音信』などなどの呼び名があ  
る最強最悪の魔法使い、そのくらいが僕の知っている情報だ。

しかし実際に見てみるとかなり印象が違う、長い金髪と十歳くら  
いにしか見えない幼い姿、少しつり目だが整った顔と真っ白い素肌、  
月並みの台詞だがまるで人形のようなだが、こうやって怒っている姿  
を見てると子供にしか見えない。

「ん？ 私の顔に何かついているのか？」

「いや、イメージしてた闇の福音とはだいぶ違ったので……」

「ふ、ふん、今はこんな姿をしているが貴様が持っているイメージ  
が私の本当の姿だ、今の私が素ではないのだからな！！」

なんだろうと必死になって否定している、なんか嫌な思い出でもあ  
るのだろうか。

ガチャ

「ただいま帰りました」

後ろからドアが開く音が聞こえて振り返ると紙袋を両手で持った

絡繰

あ、目があった。

「お目覚めになったようですな」

「ああ、おかげ様で」

「それはよかったです」

絡繰は紙袋から薬をだし、闇の福音に渡した後に台所から水を持ってくる。

闇の福音と絡繰が主従関係であることは知っていたが、この様子を見ると改めてそうなんだと実感する、というか正座していることにツッコんでほしかった。

「マスター、少し明石さんと少し話をさせてもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、ああ、好きにしろ」

少し戸惑った闇の福音、小さな声で「珍しいな、茶々丸が自分の意見を言うなんて……」とか呟いている、家の中でも外と同じ対応をしているのだったら確かに珍しいと思う。

「では早速ですが明石さん、一つ質問があります」

「ん、なんだ？」

絡繰が質問するなんてますます珍しいな、一年くらい前から知り合っていて僕から質問することはあっても、絡繰から質問をされるなんてことは一度もなかったと思う。

「どうして私を助けたんですか？」

「うっ……」

今のうめき声は僕ではなくネギ君が漏らしたものの、僕の自業自得とはいえ攻撃をしたのはネギ君なのでそれなりというかなかなり罪悪

感を感じているようだ。

「絡繰が美人だからさ！」

歯をキラツと光らせてかっこつけて言ってみる。

「「「「「……………」」」」」

あ、固まった、そんなに僕ってこつこつという台詞がそんなに似合わないんだろつか。

「…………真面目に答えてください」

闇の福音とチャチャゼロは呆れた目で僕を見ているがネギ君と絡繰は真剣な目つきだ。何故だろう、絡繰はいつもと変わらなく無表情なのに何か怒っているように見える、

「いやいや僕はいつでも真面目さ、美人だったから助ける、否絡繰だから助けたのかな」

「私、だからですか？」

「ああ、もしネギ君を狙っていたのが赤の他人だったら助けようとは思わない。絡繰、お前はお前が思っているよりずっと美人ですつといひ奴だ、そして何より僕の友達だったからこそ僕はお前を助けた。これ以上深い理由はあるかい？」

「友達…………ですが、私と明石さんが」

「ああ、少なくとも僕は現在進行形でそう思っている」

友達になろうなんていつた覚えはないけど友達だ、僕の勝手な思い込みかもしれない、本当は友達なんかじゃないかもしれないがそんなものは僕の知ったこつぢゃない、友達なんて曖昧なものを作る

ために何でそんなことを気にしなければならない。

「そうですか……………私たちは友達ですか」

「何か問題でも？」

「イ、イエ、何も問題はありません」

表情は変わらないが一瞬戸惑った声を出した、もしかしたら照れたのかな、これまた珍しい

「ああ、そうだネギ君」

「は、はい！」

「僕は魔法をぶつけられた事にたいしては怒ってないから」

「え？」

「あんなことで自分を攻めないでくれよ、あれは事故ですらない、僕が勝手に動いて僕が勝手にくらったただの自殺行為、むしろ命がかかっている勝負をしているにもかかわらず、邪魔をした僕が謝るべきなんだ、すまなかつたね」

「あ、いえ、でも……………」

それでもまだ申し訳なさそうにするネギ君。

頭がいいんだろうけど割り切ることは得意じゃないんだろう、まあでも僕がこれ以上言っても無限ループになるだけだから、これ以上は言わない。

「……………」

さつきは呆れた目で僕を見ていた闇の福音だが、今度はよくわからない目で僕を見ている

それは本当によくわからない目だ、怒っているのか、悲しんでいるのか、哀れんでいるのか、それ以外なのか、むしろそのすべてな

のか、僕にはわからない。

「じゃあ僕はこれ」

グウ

僕は立ち去ろうとした足を止めてしまう

いやなんか薄々気がついてたけどさ、やっぱり丸一日、正確には昨日の昼飯から何も食べてない状態はきついですよ、昼もパンしか食べてなかったし

「……………ご飯、食べますか？」

「いただきます」

闇の福音はまた元の呆れた目に戻ってネギ君は苦笑し絡繰は相変わらず無表情だがチラチラと僕を見ていてチャチャゼロはめっちゃ爆笑してた。その後、ネギ君と一緒にご飯を食べて、そのまま家に帰った。包帯をとってみると所々に痣ができていたので自分の体を見て若干ひいた。

絡繰、ご飯めっちゃうまかったぜ！！

かっこつかない第八話（後書き）

絡繰にフラグが建った……………？

珍しく主人公タイム

## 月夜の夜で第九話

異質で異能で異端

空を飛べるということは僕が魔法使いになつて一番喜んだことだ  
と思う、しかし空を飛ぶという行為は魔法を使う者にとつてはあん  
まり好ましく思われていない、確かに認識障害の魔法がかかつては  
いるが、カメラなどには写ってしまうので結構なリスクがある。ス  
ピードも自動車並みに出るが、コントロールが難しいのであんまり  
スピードは出せない。しかし僕はそれでも空を飛ぶことが好きだ、  
誰もいなく、誰にも邪魔されないこの空を自由に飛び回ることがで  
きるというのはすごく気持ちがいい。

さて本題だ。

僕は先ほども言ったように空を飛ぶのが好きだ、たまに寮から抜  
け出してそこらへんを飛び回っている、空から見える夜の街とい  
うのは中々いいものだが、今日はその光景を見ることはない。20時  
〜24時までメンテのために停電となるのだ、麻帆良の夜景を見れ  
ないということは残念なのだがその代わりに夜の街の光がないため  
月と星が良く見え、僕は一人空の上でこの夜空を見るといいのがな  
り好きだ。

ゾクリ!!

体中の血液が冷たくなる。今まで感じたことがないような圧倒的  
な異質な存在、僕は今まで何人も魔法使いにあつたことがあるが  
ここまで異常なものは生まれて初めだ。どうする？ 今から理事長  
のところに行つて報告をするか？ いや恐らく理事長も気が付いて

いるはずだ、こんな異常なものを気がつかないはずがない。では僕がすべきことはなんだ？ この異質な存在に対して僕はどんな行動をすればいい？

「っ！」

僕はそれを見てグチャグチャになった思考が一瞬で真っ白になる。腰まで伸ばされている金に輝いている長い髪、歳は20代中盤に見え身長は成人男性ほどあり、誰もが虜になってしまいそうなほどの美貌、そこにあるのはまさに妖艶を形にしたような存在がいたからだ。

「なるほど」

思わず呟く。

納得した、理解した、この異質で異常な存在の正体が、今思うと一番最初に思い浮かばなければならぬことじゃないか、

闇の福音エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルの復活

理由はわからない、だが興味はある。

「こんばんは、闇の福音さん」

「ん？ ああなんだ貴様が……」

闇の福音の近くまで箒で移動した僕に対して闇の福音が興味なさそうに僕を見る。実際、たいして興味なんてないんだろう。

「力が戻ったんですか？」

「……………いや停電している今だけだ、だがサウザントマスターの呪

いは今夜解ける」

一瞬、返答に躊躇したが答えてくれた、嘘という可能性もなくはないが、闇の福音がそんな嘘についても何の得もないから恐らく真実なんだろう。

「そうですか」

「……………貴様は私の呪いの解き方を知っているのか？」

「ネギ君を殺すことですよね」

「ああそうだ、しかしお前は私を止めなくていいのか？ 少なからず貴様はぼーやのことを気にかけているんだろ？」

「まあ確かに出来れば生きてほしいですけど阻止なんてしようとは思いません、闇の福音が言われている通りの人物なら逆らおうとなんて考えはまず浮かばず逃げますから」

「うむ、まあ確かにそれはそうだな」

わりと満足気に納得をする闇の福音。

おそらく15年間も中学生をやっていたといのは僕が思っているよりも苦痛だろう、しかも600年以上生きた吸血鬼が中学生と生活しなければならぬとか、たとえるなら高校生が幼稚園に行かないと行けないような感じなのだろう……………うわ、想像するとこっちまで悲しくなってきた。

「それで貴様は私に何か用があるのか？」

「いえ特にはありません、綺麗な人がいたからナンパしただけです」

「貴様は……………いや、やっぱりいい、そろそろぼーやが来る時間だから私は行くぞ」

言おうとした言葉を飲み込み、一言呟いて闇の福音は飛んでいってしまった。

闇の福音が何を言おうとしたがわからないが、どうやら力が戻ったところで性格が変わると言うわけではなさそうだ、二日前に説教されただけが彼女の性格からして無闇に殺人を繰り返すようには見えなかったし、別にこのままほっといてもあまり問題はないだろうな……………。

まあ、そんな保障はどこにもないのだが。

月夜の夜で第九話（後書き）

主人公がやっと魔法を使った……！

## 戦いあう第十話

面白おかしく踊りましょう。

闇の福音の姿は僕とあったときの妖艶な大人姿ではなく、初対面したときのような子供の姿になっている。戦況は明らかでネギ君が押されている、というより初めから戦いにすらなっていない闇の福音に遊ばれているといったほうが正しい。ネギ君を生け捕りにしなくてはいけないからといっても、わざわざあんな魔法の打ち合いをしなくても吸血鬼の身体能力や特殊能力を使えばあつというまに捕まえられるはずだ。

僕は何故か操られていた裕奈と裕奈の友達の佐々木さんを大浴場まで運び終わり、闇の福音とネギ君の戦いを見ている。いくら焦っているからといっても、せめてもう少し安全なところにおいてほしかったというのが本音だが、命がけで戦っているネギ君にそんなことを言うのは酷だろう。

「氷爆!!!」

「あつっ」

闇の福音の攻撃をネギ君が障壁をはって防御するが、完全には守りきれずネギ君の体に氷がはりつく。久々に見る魔法使い同士の戦い、たった一撃で人など容易に壊してしまえるほどの威力をもつ魔法を出し合いお互いにそれを防御しあう魔法合戦、そこにあるのはどうしようもなく非日常な世界。

「ん、あれは？」

光がない暗闇の町を疾走しているツインテールの少女が見える。  
神楽坂明日菜、ネギ君のパートナーで高い身体能力をもった中学生、さつきから気になっていたことがどうやらネギ君は神楽坂さんに無断で戦っていたようだ。しかしいくら身体能力が高かろうと自動車並みのスピードで移動しあっている二人に追いつけるはずはない、だからといってもここで見捨てて無駄骨になるのは少々かわいそうだな。

「やあ、三日ぶりだねカモと神楽坂さん」

「明石のお兄さん!？」

「だ、旦那!？」

全力で走っている横に僕は低空飛行で神楽坂さんの横を飛ぶ。

一応、周りにほかの人がいないか確認したが、時刻は夜中で学生は消灯時間になっていて、しかも今日は麻帆良全体が停電をしているおかげで周りには人がまったくいない。

「ネギ君を追っているなら足をかすよ」

「あ、ありがとうございます!!」

神楽坂さんは並行して飛んでいる僕の後ろに飛び乗り、再び僕は建物よりも高く飛びフルスピードでネギ君を追う………こんなときに不謹慎だけど、飛び乗ったときにちよつとパンツが見えた。

さて、ネギ君がいる橋まで追いついたがどうやらネギ君はそこで追い詰められているみたいだ、杖は投げ捨てられてしまい満足に魔法すら使えない、ただでさえ絡繰と闇の福音の二人を相手にネギ君が一人で戦うなど無茶を通り越してただの自殺行為でさえある。

絶対絶命、これほどぴつたりな言葉はない。

「コラー！ 待ちなさいー！ー！！」

「！？」

しかし、それは神楽坂さんの登場により打開される。

闇の福音を跳び蹴りで吹っ飛ばしネギ君を抱えて橋の隅に隠れる。ただの跳び蹴りが闇の福音の障壁を破ったように見えたのはどういう仕組みだろ、まあサウザントマスターの息子のパートナーが普通の人なんてことはないし、何かしら仕掛けがあるんだろう。

「やあ絡繰、昨日ぶりだね」

「明石さん……」

絡繰に一言あいさつをして、闇の福音を見ると神楽坂さんの跳び蹴りが効いたようで、鼻血を出した鼻を押さえている。闇の福音の姿は子供に戻っているが、この異常な存在感は消えない。

「どういつつもりだ貴様、今更ばーやに助太刀するつもりか？」

「まさか！ 僕は神楽坂さんが困っていたから助けただけで、闇の福音を倒そうだなんて気持ちはさっぱりありませんよ」

僕を道化で見せると、睨みつけていた闇の福音が「まあいい」つと呟いて、僕から視線をはずす。闇の福音の目の先には神楽坂さんとネギ君、本当はそのまま逃げてしまえば闇の福音はタイムオーバーで力を失うのだが、そんな情報をネギ君達はもっていないので戦うしか選択肢はないんだろう、僕が教えてもいいがそれは流石に遠慮したい。

どちららも必死なんだ、必死じゃない僕が口出しをしちゃいけない。

「ふふっ……どうしたばーや？ お姉ちゃんが助けに来てくれてホッと一息か……？」

「うぐっ……」

「気にすんな、兄貴！！」

「何言ってるのよ！ これですべて2対2の正々堂々互角の勝負でしょ！？」

「そっだな、双方パーティーもそろってようやく正当な決闘という訳だ、だが互角かな？ ぼーやは杖なし、貴様も戦いについては全くの素人だろう」

闇の福音の言うとおり、そもそも闇の福音を相手に一人が二人になったところで全くと言っていいほど関係ない、それほどまでに強大な力なんだ闇の福音という存在は。

「行くぞ、私が生徒だということを忘れ、本気で来るがいいネギ・スプリングフィールド」

「はい！ 契約執行90秒間！！ ネギの従者『神楽坂明日菜』！！！！」

「リク・ラクラ・ラックライラック！！」

「ラス・テルマ・スキルマギステル！！」

そして再び二人の魔法使いの間に火蓋は切って落とされた。

闇の福音とネギ君の二人が詠唱を始め、絡繰と神楽坂さんの二人はお互いに距離を詰めてデコピンで相打ち、二人とも相手を傷つけないのはわかるけど何でデコピン？

「喰らえ！ 魔法の射手、氷の17矢！！」

「くっ……魔法の射手、連弾・雷の17矢！！」

ドドドドカン！！

「ハハ！！ 雷も使えるとは！！ だが詠唱に時間がかかり過ぎだぞ！！ リク・ラクラ・ラックライラック闇の精霊29柱！！」

「くうっ…ラス・テルラ・スキルマギステル光の精霊29柱！！」

ドドドドドドパッ！！

「うくっ…」

「アハハ、いいぞ！ よくついて来たな！！」

闇の福音とネギ君はお互いに詠唱を完成させ、両者ともにぶっつけ合って相殺させるのを繰り返す。ネギ君は必死だが闇の福音は完全に遊んでいて笑っている、魔法もあえてネギ君が出せそうなレベルに下げているし、悪の魔法使いというよりいいじめっ子みたいだ。

「ラス・テルマ・スキルマギステル来れ雷精、風の精！！」

「リク・ラクラ・ラックライラック来れ氷精、闇の精！！」

「えっ…」

「フッフ」

どうやらお互いに同種の魔法を出すようだ。

……訂正しよう、闇の福音はいいじめっ子みたいではなく完全にいいじめっ子である、

「雷を纏いて、吹きすさべ南洋の嵐」

「闇を従え、吹雪け常夜の氷雪」

「来るがいいぼーや！！ 闇の吹雪！！！！」

「雷の暴風！！！！」

ドン……！！

「う……う……」

「ぐうっ……くくっ……」

闇の福音の黒い渦を巻いた魔法とネギ君の白い渦を巻いた魔法がぶつかり合い、その威力は互いに均衡している。その余波で飛行している僕が吹き飛ばされそうになるほどで、僕は橋の下に潜りこんでやり過ごすことにした、こんなものを何かのはずみで喰らってしまつたら命の保障はない、

「ハ、ハックシヨン……！！」

「な……何！？」

くしゃみをしたはずみでネギ君の杖は割れてしまつが、それがきつかけで威力が増しネギ君の魔法が闇の福音を魔法もろとも飲み込む、威力の桁が違うその攻撃を受けた闇の福音のことがちよつと心配だが、そんなことは杞憂に終わった。

闇の福音はあまりダメージがなく、普通に空を飛んでいた………全裸で

## 戦いあつ第十話（後書き）

本編との違い

明日菜が主人公を使って橋まで行きました。

ちよくちよくネギまっばい描写を入れていますが中々うまくいかな  
い……

茶番劇な第十一話（前書き）

短いです。

## 茶番劇な第十一話

偽りでも意味はある。

ずっと違和感があった。

闇の福音を見たとき、ネギ君と闇の福音が戦っているとき、神楽坂さんと一緒にここまで来るとき、それが何だがわからなかったから気にしなかった。だけどまあわかってしまえばそれまでだ、ひとつわかってしまえばすべてがわかってしまう茶番

「…やりおつたな小僧、フフツ…フフフ期待通りだよ、流石はやつの息子だ…」

「あ、あわつ、脱げッ…!? ご、ごめんなさい!」

「や、やったぜ兄貴、あのエヴァンジェリンに打ち勝ったぜ!? 信じられねー!!」

「ぐっ……だがぼつや、まだ決着はついてないぞ」

「いや、あなたの負けだよ闇の福音、冷静に考えればわかることだ、こんだけ魔法をドンパチやっているにも関わらず『魔法生徒はおるか、ほかの魔法先生が誰も来てないのはおかしいだろ?』」

「いけないマスター! 戻って!!」

「な、なに!!」

おめでとうネギ君、君は最初から勝つことは決まっていた出来レースでも、ここまで粘ってくれたおかげで停電の復旧が早まったくらいに見せれたんだ、それが出来ただけで君は誇っていい。

「予定より七分二十七秒も停電の復旧が早い！！ マスター！！」  
「ちっ、いい加減な仕事をしおって……………！！」

チリッ、バシンー！！

「キャンー！！」

「エヴァンジェリンさん！」

学園の結界によって魔力を失い落ちていく闇の福音。

まあ橋の近くに飛んでいた僕がいたから、そのまま川へダイブなんてことはなくしっかりお姫様抱っこで受け止めました、子供の姿じゃなくて大人の姿のほうがよかったなーとか思ったり思わなかったり。

「残念ながら時間切れですね」

「……………何故、助けた」

「何故って……………何故なんでしょう？」

「私が聞いているんだ！」

「あえていうなら闇の福音さんが美少女だからですかね」

「な……………！」

「お、もしかして照れました？」

「ふ、ふざけるな！」

ボコッ

ほっぺを思いつきり殴られました。

体勢が悪いし、魔力が使えない状態なのに何故か普通に痛いです。

「ありがとうございます、明石さん」

「いや、僕は傍観しただけだしあんな派手な魔法合戦を間近で見ら

れた観戦代ということだ」

流石に見殺しにするのは気分が悪いしねとは言わない、ネギ君を見殺しにしようとした僕が今ここでそれだけは絶対に言っただけじゃない、結果的にネギ君が死なずにすんだがああ、闇の福音を相手にしているんだ、出来レースがひっくり返ってしまう可能性なんて十分にある。

「ふ、やはり私はここから出られない運命なのか……」

「エヴァンジェリンさん……」

「マスター……」

「エヴァちゃん……」

「エヴァちゃんって言うな！」

自傷気味に笑う闇の福音と、それに同情したような視線を向けるネギ君と神楽坂さん

ああ、そんな同情を誘うような絶望的な表情をしないでくれよ、せめてネギ君か神楽坂さんが勝ち誇ってくれたらそれはそれでハッピーエンドなんだからさ、こんな変な終わり方はさあ……

ぶっ壊したくなるんだよ

## 茶番劇な第十一話（後書き）

本編との違い

主人公がエヴァを助けました。ネギが生き残ったことに対してあまり喜んでません。

かなり独自の解釈があります、ご了承ください

「都合主義な第十二話（前書き）」

主人公タイム！

## 「都合主義な第十二話」

さあて、御都合主義と行きますか。  
ハッピーエンド

「さて闇の福音、一つだけ質問に答えてもらってもいいかな？」

「……なんだ？」

「呪いを解けるといったらどうする？」

「はっ？」

「えっ？」

「ふえ？」

「………はあ!？」

ナイスリアクション。

そんな表情を見ただけで僕は心のそこから最高だと思う、ちなみに上からネギ、絡繰、神楽坂さん、闇の福音の順だ。

「と、解けるのか!？」

「解けますよ、解くかどうかは別として」

「な……!」

「土下座してお願いしますって言えば解いてあげますよ」

「ふ、ふざけるな! 茶々丸!」

「かしこまりました、マスター」

一瞬で絡繰に背後をとられ腕に関節技をかけられる、別に逃げるつもりはないんだからこんなことはしなくてもいいのに。

「腕を折られたないなら呪いを解け」

「じゃあ腕を折られる前に質問だ、貴女は本当にのろいを解きたいのか？」

「そんなもの解きたいに決まっているだろ」

「本当に？」

「……………何が言いたい？」

闇の福音は僕を睨み付ける、もしここで僕がふざけたことを言うのであれば瞬時に腕を折られるだろう。しかしだからといってここで引くわけにはいかない、

「本当は気がついてるだろう闇の福音、あんたはまだ迷っているんだ、サウザントマスターとの約束を破ることを…否、ナギ・スプリングフィールドを裏切ることを」

無意識的であつたかもしれないがこれは確信を持って言える。もし本気でネギ君を殺しに行っていたのならいくら遊んでいたからと言つても、いくらサウザントマスターの息子だからといつても、たかが一人の魔法使い見習いを相手にあんな時間がかかるわけない。

「そんなわけあるわけがない！　そもそも裏切つたのはアイツのほうだろう！…！」

「ああ確かにナギ・スプリングフィールドはあんたを裏切つた、だけれどあんたがナギ・スプリングフィールドを裏切るとはまた別のこと」

「く……………だが奴はもう死んでいるんだぞ！…！」

「死んでません！」

おーっとそこでの乱入は少し予想外だよネギ君。

話の内容がよくわからずウトウトしてた神楽坂さんはネコみたくビクツと目を覚ます、いくら時間が遅いからってこの時間帯で雰囲気



「はい」

うれしそうに、本当にうれしそうに笑う闇の福音、さっきまで湿っぽい雰囲気が一気に吹き飛んだような気がするが、まあ企むような笑みよりそっちの笑顔のほうが似合っているよなーなんて柄にもないことを思ってみたり、

「おい貴様」

「なんですか？」

さっきとは違い怒りの眼差しではなく、決心がついた目

「質問に答えてやる、今すぐにも私の呪いを解け、奴が生きているのなら奴の顔を全力で殴ってそのまま式場にでも直行せねば気がすまん」

「いいんですか？ 裏切ることになりますよ」

こんな目をした人に、こんなことを聞いても無駄だということ僕は知っている。

「はん！ 知ったことかそんなこと！！ 裏切ろうがなんだろうが関係ない、なんせ私は」

鼻で笑い確実に、簡潔に、完璧に言う

悪い魔法使いなのだからな

そう言って闇の福音は笑う。

かっこよく、本当にかっこよく、惚れてしまいそうなほどかっこよく笑う、ああ、最高だよあんた。

「わかりました、では一つ……いえ二つほど約束してください」  
「なんだ？」

「一つ目はもし探しに行くのならネギ君も連れて行ってください」

「え！？」

「……………わかった」

ネギ君は驚いたようにこちらを見るが、本人を無視して勝手に約束をしちゃいましたが今は気にしないということだ。

「もう一つは……………結婚式するなら僕も呼んでくださいね、これでも一応神父もどきをやっていた経験があるんで」

「は？……………フツツ、ハハハハ！ ああわかった約束しよう！ おい茶々丸、そろそろ離してやれ」

「はい、わかりました」

絡繰は僕を解放して、立ち上がるときに手を貸してくれた。

変な体勢でいたせいか、肩の関節がおかしくなったような気がする、まあ絡繰がやったことなら本当に肩の関節がおかしくなっても、あんまり気にしないけどね。

「それじゃあいきます……………アデアット」

「貴様、従者だったのか……………」

僕は懐からカードを取り出し呪文を言い体の周りが光りだす、まさか闇の福音に対して使うだなんて夢にも思ってもいなかった。

手に持ったのは一本の小さなナイフ

飾りっ気もなく、細く簡単に折れてしまいそうなほど細く、刃が

潰れていて斬ることも出来ず、先が丸くなっていることで突き刺すこともできない最弱の刃物

「それが貴様のアーティファクトか？」

「ええ、これが僕のアーティファクト“呪い殺しの剣”です」

ペン回しの要領でナイフをクルクルと回し闇の福音に近づく。

「見た目どおりこれは武器じゃありませんから、避けないでくださいね」

「ああ」

一振り、闇の福音に切りつけ、

パリンッ！

闇の福音の体から何かが壊れた音がする、手ごたえもあつたし成功したはずだが……

「やったのか？」

「ええ、そのはずですよ」

確認のために橋のすみまで行く、あれだけもったいぶって失敗だったらかつこ悪いよね、

「い、行くぞ……」

「は、はい」

「……（ゴクッ）」

「マスター……」

闇の福音をネギくんと神楽坂さんは真剣な表情で、絡線は心配そうに見ている。

……あれ？ 誰か忘れていたような、まあいつか

ザッ

たかが一歩、だがこれはとても大きな意味を持っている、闇の福音はしっかりと橋をまたいで外に出れた。

「フ……フフ………ハハハハハ！ 見る茶々丸、外に出れたぞ！！ 奴の忌々しい呪いからやっとなんか解放されたんだ！！！」

「はい、おめでとうございますマスター」

「おめでとうございます、エヴァンジェリンさん」

「おめでとう、エヴァちゃん」

成功だ、とりあえず心の中で安堵しておく。

しかし闇の福音の呪いを解いてしまった僕はただではすまないだろう、なんせ世界最高の賞金額である闇の福音を自由にしてしまったんだ。よくて退学、悪ければなんて考えたくもない。

ただまあ、なんとかかなるような気はする。

## 1)都合主義な第十二話(後書き)

本編との違い

エヴァの呪いが解きました、しかしエヴァは学園から出られるだけで力が戻ったわけではありませんので、まだ学校から出るつもりはありませんが修学旅行には行きます。

## その後の第十三話（前書き）

あとがきにわりと大事なお知らせがあります。

## その後の第十三話

請け負うこと

実を言うと僕が麻帆良に住んでから二年しかたっていない。僕は母親が死んでから数年もしないうちに母親の友人で後に僕の師匠に当たる人物が僕を連れて世界各地を回っていた、ただの旅行というなら良かったのだが魔法使いの修行もかねていたのでそんなほのぼのしたものじゃない……というか魔法使いの師匠なのに魔法が使えないってギャグにもならんぞ。まあそんなこんなで時には人助けをしたり、時には神父に成りすましたり、時には謎の結社を破壊しながら僕は無事に修行を終えて父親と妹が住んでいる麻帆良に住み始めたのである。

さて本題だ

僕は理事長室で麻帆良の理事長である近衛近右衛門このえこのえもんと向き合っている。理由はもちろん先日僕が闇の福音の件、何かすごい怒られると思っていたが理事長からは怒気らしいものは感じられない。

「ふおおおお、そんな警戒をせんでいい、この件に関していえば我々にも非があるからのお」

「あ、そうですね」

理事長は長い髭を撫でながら笑う、なんかちょっと安心した。

「ところでお主はこの件に関してはどこまで把握しておる？」

「まあ大体で言うとネギ君を守るためにやった行為ってことくらい

はわかっています」

そう、この件の目的はネギ・スプリングフィールドを守ること。闇の福音がもし万全の状態ではとどの妨害もないのにも関わらずネギ君が生き延びられれば、闇の福音は諦めるまでいかなくても無闇に襲うことはなくなる。だからあの時、魔法生徒や魔法先生はが乱入をしてこなかったというわけだ……まあそれでも僕みたいな出来損ないの魔法使いや神楽坂さんみたいなイレギュラーの存在は予想外だったと思うけど

「それなら改めて説明することはないのお」

「ええ、ですからそろそろ本題に入ってください」

僕の発言に理事長は目を細める、それだけ緊迫した空気になり息苦しくなったような感じがする。

「お主のアーティファクト……あれは一体なんじゃ？」

「呪い殺しの剣……って言っても意味がないですよね」

「うむ、そもそもワシが知る限りだと呪い殺しの剣という武器はもちろん、呪いのみを斬ることができる武器なんぞ聞いたことがない」

「お察しの通り呪い殺しの剣というのは嘘です」

「やはりか……しかし現にエヴァンジェリンの呪いは完全に解けている、これは一体どういうことじゃ？」

「……まあ黙っててもそのうちばれますから言いますよ」

「うむ」

「僕のアーティファクトは請負のナイフって言います、つまりこの闇の福音の呪いを請け負いました」

斬ったのではなく請け負った。

消したのではなく背負った。

壊したのではなく受け取った。  
たったそれだけのこと。

「なるほどのお、確かにそれならナギが使った呪いでも関係はない……が、しかしお主は悔やんでないのか？ 一生ここで暮らすことになるんじゃないぞ」

「悔いはありません、それにまだ呪いが解けないと決まったわけではないですから」

「そうか、お主がそういうのであればワシはかまわんがのお」

「はい、では僕はこれで失礼します」

僕は理事長に背を向けて、理事長室から出る。

悔いがないなんて大嘘、だって僕はいつだって後悔しながら生きてる。

だから今更一つや二つ悔いができてもしないし気にもならない。

たかが麻帆良に出られないだけ、たったそれだけのこと

ただ、オコジヨにされなかったのは本当によかった……

## その後の第十三話（後書き）

やっとエヴァ編を終了です。

実はエヴァ編まではストックがあったのですが、それ以降はまったくと言っていいほどストックがありませんので更新は大幅に遅れます。それとオリジナル小説のほうもいい加減書き始めないといけないので、下手すれば年単位で更新がストップする可能性があります。作者の勝手でこのようなことになってしまい本当に申し訳ありません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1089y/>

---

ヨワイマハウツカイ

2011年11月16日18時45分発行